

第4回バイオリソースセンター実験動物検討委員会議事録要旨

1. 日 時 平成17年 1月17日(月) 14:30~17:30
2. 場 所 新東京ビル7階 理化学研究所 東京事務所 大会議室
3. 出席者
(委員等)
米川 博通 委員長、木南 凌、城石 俊彦、日合 弘、山村 研一、横山 峯介 各委員
文部科学省 ライフサイエンス課 村松 学 係長、大畑 拓雄 調査員
(理研側)
森脇センター長、小幡リソース基盤開発部長、小倉遺伝工学基盤技術室長、阿部動物
変異動態解析技術開発チームリーダー、土井生体応答情報技術開発サブチームリーダ
ー、吉木室長、池前任研究員、目加田研究員、平岩前任技師、野呂前任技師、持田先
任技師、中田技師、富田研究推進部長、山田企画課長
4. 議 題
 - (1) 前回議事録の確認
 - (2) バイオリソースセンターの概要説明
 - (3) 実験動物開発室の事業実績の概要説明
 - (4) 実験動物開発室の事業の今後の方針について
5. 主な内容
 - (1) 前回議事録の確認
第3回の議事録の配布と第3回議事要旨(案)を各委員に配布し確認を行った
が、特に委員からの指摘等はなく承認された。
 - (2) バイオリソースセンター(BRC)の概要説明
バイオリソースセンターに16年7月1日をもって和光にあるJCMが微生物
材料開発室として移管され、動物個体から微生物とそれに係わる情報まで取扱セ
ンターとなった。また、リソースに係わる研修事業も本年度よりスタートした。
今年度からは環境ストレスを研究するためのリソースの整備を始めた。本センタ
ーの目標として細胞も含めて他のリソースも2010年までに世界最高水準のリ
ソースを整備することを目標としている。また、OECDのバイオリソース・ネ
ットワークの構築、マウスでインターナショナル・フェデレーション・マウス・
ネットワークの構築等にも参画し世界的にも認知されつつある。当センターの業
務活動の評価と云う点では、本委員会を含めてCSTP、独立行政法人評価委員
会、アドバイザー・カウンシル等の委員会があるがCSTPの評価では2番目
に高いA評価を得ており、独立行政法人委員会ではバイオリソースについて重要
な担い手であって欲しいという評価、またアドバイザー・カウンシルでは、財
政基盤に注視して欲しいと云うコメントがあった。
 - (3) 実験動物開発室の事業実績の概要説明
バイオリソースセンター実験動物開発室の特徴として、野生マウス由来系統の充
実ということで、国内でつくられた野生マウス由来の近交系、海外からも色々な野
生マウス由来系統が集まって来ている。遺伝子操作マウスで、生体内のストレスが
加わったときに蛍光タンパクにより観察可能なモデルマウス等のリクエストが高
かった。
収集にあたっては、胚及び精子の凍結保存が非常に重要で系統が増加するほど重

要である。品質管理関連では微生物検査、遺伝検査、染色体検査について実施している。寄託、提供ともに順調に伸びており、これは広報宣伝活動によって得られた成果である。具体的には国内外の研究者に500件を超えるメールを発信し、マウスシンポジウム等も実施した。平成16年度の提供件数は1,000件を超える実績が得られている。また、MTAについては、日本語版、英語版のMTAの説明書を作成し、寄託、提供の両ユーザーにMTAの意義とメリットについて啓発・普及を図っている。

国際交流と連携では、International Federation of Mouse Resource, FIMReの設立に参加、また英国MRC、米国ジャクソン研究所との連携、IMSRへの参加等、国際的マウスリソースのネットワークなかで積極的な役割を果たした。

(4) 実験動物開発室の事業の今後の方針について

- ① 研修事業に関して、研修後のフォローアップが大切。研修したことが役に立っているという具体的な報告をして頂く必要がある。また、このことに付随して研修の方法についても研修のオブリゲーションの中に受講生に対して研修の効果を確認すると云った方策をしてはどうか。
- ② 研修事業をさらに発展させた形で、国家資格まではいかなくても資格認定制度、例えば実験動物取扱技術者のような資格認定制度を創られたどうか。また、現在、熊本大学と理研BRCで研修事業を進めているので、共通のプロトコルで、どちらで研修を終えても同レベルを維持し、研修終了者は、インターネットで公表することで、資格としての意味合いを持たせてはどうか。
- ③ 感染症法改正の件で輸入動物の届け出制度については、既に厚生労働省から文科省に詳細な話があったときは施行令、施行規則等が全て手当された段階であり、全て終わっていた状況であった。施行後1年間は改正することができないので、来年9月1日施行予定で当初は相当の混乱が予想されるため、それ以前に処置した方が得策である。
- ④ 10年後、あるいは20年後を見据えたマウス以外の新規リソースの選定をされてはどうか。具体的には毎年1回程度の割合で海外の動向、国内の動向をウォッチするような取り組みをしてはどうか。

以上